

# 将門記のメタファー——「雷」の文学誌・覚書

葛 綿 正 一

## 要旨

『将門記』は承平・天慶の乱を記した漢文文献である。軍記文学の先駆として分厚い研究史を有しているが、ここでは『将門記』に出てくる「雷」というメタファーに注目し、将門が雷神であるかのように描かれていることを指摘する。

また「雷」の文学誌とでもいうべきものを掘り起こし、表象の問題から「雷」の崇高性と喜劇性について論じる。

キーワード 将門記、雷、神話、軍記、表象、崇高、喜劇

## 一 『将門記』のメタファー

『将門記』は承平・天慶の乱を記した漢文文献である。軍記文学の先駆として分厚い研究史を有しているが、ここでは『将門記』に出てくる「雷」というメタファーに注目してみたいと思う。興味深い特徴がみられるからである。

（用例一）以其四日、始自野本・石田・大串・取木等之宅、迄至与力人々之小宅、皆悉焼巡。（中略）如員焼掃。哀哉、男女為火成薪。珍財為他成分。三界火宅財有五主、去来不定、若謂之歟。其日火声論雷施響。其時煙色争雲覆空。

其の四日を以て、野本・石田・大串・取木等の宅より始めて、与力の人々の小宅に至る迄、皆悉く焼き巡る。

(中略) 員の如く焼き掃へり。哀しき哉、男女は火の為に薪と成りぬ。珍財は他の為に分かつところと成りぬ。三界火宅の財に五主有り、去来不定なりといふは、若しくは之を謂ふか。其の日の火声は雷を論じて響きを施す。其の時の煙色は雲と争ひて空を覆ふ。

(引用は小学館新古典全集による、二〇頁)  
承平五年二月四日の戦闘場面である。炎の音が響きわたったというが、将門の合戦とは「雷」の響きのごときものなのである。

〈用例二〉其以廿二日、将門帰於本郷。爰良正并因縁伴類、下兵恥於他堺、上敵名於自然。(中略) 然而依会稽之深、尚発敵対之心。仍勅不足之由、挙於大兄之介。其状云、雷電起響、是由風雨之助。鴻鶴凌雲只資羽翔之用。羨被合力鎮将門之乱悪。然則国内之騒自停、上下之動必鎮者。

其の廿二日を以て、将門は本郷に帰る。爰に良正並びに因縁や伴類は、兵の恥を他堺に下し、敵の名を自然に上ぐ。(中略) 然れども会稽の深きに依りて、尚し敵対の心を発す。仍て不足の由を勅して、大兄の介に挙ぐ。其の状に云はく、「雷電の響きを起すは、是れ風雨の助けに由る。鴻鶴雲を凌ぐはただ羽翔の用に資る。羨はくは合力を被り将門の乱悪を鎮めむと。然れば則ち国内の騒ぎ自から停まり、上下の動き必ず鎮まらむ」てへり。

(二五頁)

承平五年十月二二日の一節である。「雷」に打ち克つには、「雷」の力によるほかないだろう。良正たちは将門を鎮めるべく、「風雨の助け」を得て「雷電の響き」を引き起こそうとしているのである。

〈用例三〉以同月十七日、同郡下大方郷堀越渡固陣相待。件敵叶期、如雲立出、如雷響致。其日、将門急劳脚病、毎事朦朧。未幾合戦、伴類如算打散。所遺民家為仇皆悉焼亡。

同月十七日を以て、同郡の下大方郷堀越渡に陣を固めて相待つ。件の敵期に叶ひて、雲の如く立ち出で、雷の如く響きを致す。其の日、将門急に脚病を勞りて、事毎に朦々たり。未だ幾も合戦せざるに、伴類算の如く打ち散りぬ。遺る所の民家仇の為に皆悉く焼け亡びぬ。

(三四頁)

承平八年八月一七日の一節である。相手に「雷」の響きを引き起こされたときは、将門自体が弱体化してしまうのだが、これは興味深い点であろう。『将門記』とはいわば「雷」のメタファーを争奪し合うテクストなのである。「将

門は馬に羅りて風の如くに追ひ攻む」ともみえる（四三頁）。そして八幡大菩薩のお告げと亡霊道真の力添えで新皇を名乗ることになる。

〔用例四〕新皇、揚声已行、振劍自戰。貞盛、仰天云、私之賊則如雲上之雷。公之從則如厠底之虫。然而私方無法。公方有天。三千兵類、慎而勿歸面者。日漸過於未剋、臨於黄昏。（中略）公從者自常強、私賊者自例弱。

新皇は、声を揚げて已に行き、劍を振るひて自ら戦ふ。貞盛は、天を仰ぎて云はく、「私の賊は則ち雲の上の雷の如し。公の從は則ち厠の底の虫の如し。然れども私の方には法なし。公の方には天有り。三千の兵類は、慎みて面を帰すこと勿れ」てへり。日は漸く未の剋を過ぎて、黄昏に臨みぬ。（中略）公の從は常よりも強く、私の賊は例よりも弱し。（七八頁）

天慶三年二月一日の一節である。本人が意図しているどうかにかかわらず、貞盛の発言は明らかに良正の書状に關連づけられるだろう。「雷」のメタファーで飾れるとき、將門は圧倒的に強いようにみえる。しかし、將門は「私の賊」としかみなされないという限界がある。「昨日の雄は今日の雌なり」とある通り、すべては逆転される。それは次の場面に見て取ることができる。「十四日の未申の剋を以て彼此合戦す。時に、新皇は順風を得て、貞盛、秀郷等不幸にして咲下に立つ。其の日、暴風枝を鳴らし、地籟塊を運ぶ。（中略）此等が方を失ひ立ち巡るの間、還りて順風を得つ。時に、新皇、本陣に帰るの間、咲下に立つ」（八二頁）。天慶三年二月一四日の一節だが、「順風」を失つた將門は鉄身をもつた「嗤尤」のごとく敗北しているのである。最後に勝者たちの論功行賞が行われる。

〔用例五〕雲如從暗霞外散、影如類空途中亡。（中略）方今、雷電之声尤響百里之内、將門之惡既通於千里之外。將門常好大康之業、終迷宣王之道。仍作不善於一心競天位於九重。過分之辜、則失生前之名、放逸之報、則示死後之媿。

雲の如きの從は暗に霞の外に散り、影の如きの類は空しく途の中に亡ぶ。（中略）方に今、雷電の声は尤も百里の内に響き、將門の惡は既に千里の外に通れり。將門は常に大康の業を好みて、終に宣王の道に迷ふ。仍て不善を一心に作して天位を九重に競ふ。過分の辜、則ち生前の名を失ひ、放逸の報い、則ち死後の媿を示す。

これに続いて冥界における将門の消息が告げ知らされるが、冥界消息とは「雷電」のごとく響き渡った将門の評判が生み出したものである。『将門記』に続く軍記は、こうした「雷の響き」の余波といえる。「雷」のメタファーが書状の中で用いられていたが、『将門記』自体が一種の書状であり、「風雨の助け」を募っていたのではないか。いずれにしても、将門の鉄身は「雷」を帯びているように思われる。

『将門記』は「天下に謀反有りて、之と競ふに日月の如し。然れども公は増し私は減ぜり」と結論づけている。メタファーに着目してみれば、それは日月という光の闘争であつたと同時に、「雷」の闘争でもあつたのである。

もちろん、戦闘場面における「雷」の比喩は『日本書紀』に先例を見出すことができる。<sup>1)</sup>

連戦不能取勝。時忽然天陰而雨水。乃有金色靈鷲、飛来止于皇弓之弭。其鷲光晔煜、状如流電。由是、長髓彦軍卒皆迷眩、不復力戦。

連に戦ひて取勝つこと能はず。時に忽然にして天陰けて雨水ふる。乃ち金色の靈しき鷲有りて、飛び来りて皇弓の弭に止れり。其の鷲光り晔煜きて、状流電の如し。是に由りて、長髓彦が軍卒、皆迷ひ眩えて、復力め戦はず。

(引用は岩波古典大系による、神武紀即位前紀戊午年一二月)

可分命將軍、百道俱前。雲会雷動、俱集沙喙、剪其鯨鯢、紆彼倒懸。

將軍に分ち命せて、百道より俱に前むべし。雲のごとくに会ひ、雷のごとくに動きて、俱に沙喙に集らば、其の鯨鯢を剪りて、彼の倒懸を紆べてむ。  
(齊明紀六年十月)

即以前の神武が長髓彦を撃つ場面であり、齊明天皇が百濟への援軍を命じた場面である。しかし、『日本書紀』の場合「雷」の比喩が特定の人物に集中しているわけではない。ここで注目しておきたいのは、『将門記』における「雷」のメタファーが将門に集中し、その結果、雷神のごとき将門イメージを作り上げているのではないかという点である。<sup>2)</sup> そうした点を検証するためには、もう少し視野を広げてみる必要があるだろう。

## 注

<sup>1)</sup> 『万葉集』一九九番歌には「御軍士をおどもひたまひ斉ふる鼓の音は雷の声と聞くまで吹きなせる……」とあり(引用は講談社文庫)、『陸奥話

記』には義家について「雷奔風飛、神武命世」とある（引用は小学館新古典全集）。

② 時代は下るが、御伽草子『倭藤太物語』（新潮古典集成）をみると、興味深い細部が浮かび上がる。それは将門の表象不可能性であり（「いづれを将門と見分けたる者はなかりけり」、鉄身としての将門である（御身体悉く黄金なり））。そんな将門も、龍神に庇護された倭藤太には勝てないのである（電光石火のごとくにて、光と共に失せにけり）。

## 二 「雷」の文学誌

1 ここでは「雷」の文学誌とでもいうべきものを掘り起こしてみたい。まず注目するのは『古事記』の一節である。イザナキが黄泉の国にイザナミを訪ねる場面だが、「雷」は表象の問題を提起しているように思われる。

莫視我。如此白而還入其殿内之間、甚久難待。故刺左之御美豆良湯津々間櫛之男柱一箇取闕而、燭一火入見之時、宇士多加礼許呂々岐弓、於頭者大雷居、於胸者火雷居、於腹者黒雷居、於陰者析雷居、於左手者若雷居、於右手者土雷居、於左足者鳴雷居、於右足者伏雷居、并八雷神成居。於是伊耶那岐命見畏而逃還之時、其妹伊耶那美命言、令見辱吾。即遣予母都志許売令追。

「我を視ること莫れ」と、如此白して、その殿の内に還り入る間、甚久しくして、待つこと難し。故、左の御みづらに刺させる湯津々間櫛の男柱を一箇取り闕きて、一つ火燭して入り見し時に、うじたかれころきて、頭には大雷居り、胸には火の雷居り、腹には黒雷居り、陰には析雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足には伏雷居り、并せて八くさの雷の神、成り居りき。是に、伊耶那岐命、見畏みて逃げ還る時に、其の妹伊耶那美命の言はく、「吾に辱を見せしめつ」といひて、即ち予母都志許売を遣して、追はしめき。

（引用は小学館新古典全集による、上巻）

興味深いのは「我を視ること莫れ」という禁忌が働いている点である。「雷」とは見てはならないものであり、容易に表象できるものではないだろう（容易に表象できないからこそ、見てはならないのだ）。いわば表象の限界である。直後にイザナキは逃亡しているが、表象不可能なものに出会ったときは逃亡するほかない。ヨモツシコメとは表象不

可能なものの形象なのである。

火の役割にも注目しておきたい。イザナミは火の神を生んで黄泉の国に行くわけだが、火は生と死にかかわる両義的な記号であろう。イザナミは火を見た瞬間に死が訪れるのである。イザナキが見てはならないものを見てしまうと、必要とされるのも火である。その意味で火は表象不可能なもの出現を意味している。

では、『日本書紀』の場合はどうか。

請勿視吾矣。言訖忽然不見。干時闇也。伊奘諾尊、乃拳一片之火而視之。時伊奘再尊、腫滿太高。上有八色雷公。伊奘諾尊、驚而逃還。是時、雷等皆起追來。時道辺有大桃樹。故伊奘諾尊、隱其樹下、因採其実、以擲雷者、雷等皆退走矣。此用桃避鬼之縁也。

「吾をな視ましそ」とのたまふ。言訖りて忽然に見えず。時に闇し。伊奘諾尊、乃ち一片之火を拳して視す。時に伊奘再尊、腫滿れ太高へり。上に八色の雷公有り。伊奘諾尊、驚きて逃げ還りたまふ。是の時に、雷等皆起ちて追ひ来る。時に、道の辺に大きな桃の樹有り。故、伊奘諾尊其の樹の下に隠れて、因りて其の実を採りて、雷に擲げしかば、雷等、皆退走きぬ。此桃を用て鬼を避く縁なり。

(神代上)

「雷等皆起ちて追ひ来る」とあるが、『古事記』のヨモツシコメの正体は、『日本書紀』によれば「雷」だったことになる。雷はすなわち鬼であり、表象不可能なものなのである。『日本書紀』における少子部の記事も表象の問題にかかわっているようにみえる。

七年秋七月甲戌朔丙子、天皇詔少子部連螺羸曰、朕欲見三諸岳神之形。汝膂力過人。自行捉來。螺羸答曰、試往捉之。乃登三諸岳、捉取大蛇、奉示天皇。天皇不齋戒。其雷虺虺、目精赫々。天皇畏、目蔽不見、却入殿中。使放於岳。仍改賜名為雷。

七年の秋七月の甲戌の朔丙子に、天皇、少子部連螺羸に詔して曰はく、「朕、三諸岳の神の形を見むと欲ふ。汝、膂力人に過ぎたり。自ら行きて捉て來」とのたまふ。螺羸答へて曰さく、「試に往りて捉へむ」とまうす。乃ち三諸岳に登り、大蛇を捉取へて、天皇に示せ奉る。天皇、齋戒したまはず。其の雷ひかりひろめきて、目精赤々く。天皇、畏みたまひて、目を蔽ひて見たまはずして、殿中に却入れたまひぬ。岳に放たしめたまふ。仍りて改

めて名を賜ひて雷とす。

(雄略紀)

「汝、膂力人に過ぎたり。自ら行きて捉て来」と命じられているが、強力によつて表象不可能なものを捕獲するのが少子部の役割にほかならない。直前の記事の「蚕」も、スガルにとつては表象不可能なものであつただろう。

三月辛巳朔丁亥、天皇欲使后妃親桑、以勸蚕事。爰命螺羸、聚国内蚕。於是、螺羸、誤聚嬰兒、奉獻天皇。天皇大咲、賜嬰兒於螺羸曰、汝宜自養。螺羸即養嬰兒於宮垣之下。仍賜姓、為少子部連。

三月の辛巳の朔丁亥に、天皇、后妃をして親ら桑こかしめて、蚕の事を勧めむと欲す。爰に螺羸に命せて、国内の蚕を聚めしめたまふ。是に、螺羸、誤りて嬰兒を聚めて、天皇に奉獻る。天皇、大きに咲ぎたまひて、嬰兒を螺羸に賜ひて曰はく、「汝、自ら養へ」とのたまふ。螺羸、即ち嬰兒を宮垣の下に養す。仍りて姓を賜ひて、少子部連とす。

(雄略紀)

「蚕」を集めるように命じられて、スガルは「子」を集めてしまう。これは取り違えの喜劇だが、考えてみれば、「蚕」こそ表象の驚異であろう。それ自体は変態することで安定した表象を拒みつつ、絹として見事な表象を生み出すのが蚕だからである（一度は匍ふ虫と為り、一度は殻と為り、一度は飛ぶ鳥と為りて、三色に変わる奇しき虫「仁徳記」）。少子部は養蚕の技術に深くかかわっているが、それは表象の問題と無縁ではないはずである。

『日本靈異記』でも「雷」は表象の問題と結びついている。

天皇任磐余宮之時、天皇与后寢大安殿婚合之時、栖輕不知而参入也。天皇恥輟。当於時而空電鳴。即天皇、勅栖輕而詔、「汝鳴雷奉請之耶」。

天皇、磐余の宮に住みたまひし時に、天皇、后と大安殿に寢て婚合したまへる時に、栖輕知らずして参り入りき。天皇恥ぢて止みぬ。時に当りて、空に電鳴りき。即ち天皇、栖輕に勅して詔はく、「汝、鳴雷を請け奉らむや」とのたまふ。

(引用は小学館新古典全集による、第一)

天皇の共寝と「雷」の共通点は何か。それはいずれも表象できないという点にある。だからこそ、共寝を見られた天皇は同じく見ではならないもの、見ることでできないものとして「雷」の捕獲を命じたように思われる。

緋纒著額、擎赤幡杵、乘馬從阿倍山田前之道与豊浦寺前之路走往。(中略) 走還時、豊浦寺与飯岡間、鳴電落在。

栖輕見之呼神司、入譽籠而持向大宮、奏天皇言、「電神奉請」。時電光放明炫。天皇見之恐、偉進幣帛、令返落処者。今呼電岡。

緋の蔓を額に着け、赤き幡鉾を擎げて、馬に乗りて、阿倍の山田の前の道と豊浦寺の前の路とより走り往きぬ。(中略) 走り還る時に、豊浦寺と飯岡との間に、鳴神落ちて在り。栖輕見て神司を呼び、譽籠に入れて大宮に持ち向ひ、天皇に奏して言さく、「電神を請け奉れり」とまうす。時に、電、光を放ちて明り炫けり。天皇見て恐りたまひ、偉しく幣帛を進り、落ちし処に返さしめたまひきと者へり。今に電の岡と呼ぶ。(同)

幡や籠の役割に注目してみよう。招き寄せたり閉じ込めたりすることで、雷という表象不可能なものを表象するのが、その役割なのである。「雷」そのものは恐ろしいほどの光を放つので、誰も見つめることができず、そのまま返すほかない。かろうじて「雷」の痕跡を表象できるとすれば、それは地名にとどめることでしかない。

永立碑文柱言、「取電栖輕之墓也」。此電惡怨而鳴落、踊踐於碑文柱、彼柱之析間、電撲所捕。天皇聞之放電不死。雷慌七日七夜留在。天皇勅使樹碑文柱言、「生之死之捕電栖輕之墓也」。所謂古時名為電岡語本是也。

永く碑文の柱を立てて言はく、「取雷栖輕之墓」といへり。この電、惡み怨みて鳴り落ち、碑文の柱を踊る踐み、彼の柱の析けし間に、雷撲まりて捕へらゆ。天皇聞して、電を放ちしに死なず。雷慌れて、七日七夜留まりて在り。天皇の勅使、碑文の柱を樹てて言はく、「生之死之捕電栖輕之墓」といひき。所謂古時、名づけて電の岡と為ふ語の本、是れなり。(同)

「雷」がスガルの墓に拘泥するのは、そこに「雷」の痕跡が表象されているからであろう。だから怒っているのだが、再び捕まってしまう。いわば、文字が表象不可能な「雷」を捕獲しているのである。「取」は単に連れてきたことを意味し、「捕」は逃げ去つたものを再び捕まえたことを意味しているのだろうか、二度目の反復は喜劇的な様相を帯びている。『日本靈異記』全体のテーマを先取りしているようにもみえるのだが、第一話に読み取るべきは表象不可能なものと文字の葛藤にはかならない。「雷の岡」という名前を通して、表象不可能な「雷」の一部は確実に捕獲されている。

「雷」は捉えがたいシニフィアンとして閃き轟くといってもよい。そんな浮遊するシニフィアンが第一話で地名に



結びつくのに対して、第三話では子供の存在に結びつく。

時電鳴。即恐驚擎金杖而立。即電墮於彼人前、成小子。(中略)時電言、「莫近依」、令遠避。即愛霧登天。然後所産兒之頭纏蛇二遍、首尾垂後而生。

時に電鳴りき。即ち恐り驚き金の杖を擎げて立てり。即ち、電、彼の人の前に墮ちて、小子と成る。(中略)時に、電言はく、「近依ること莫れ」といひて、遠く避らしむ。即ち、愛り霧ひて天に登りぬ。然る後に、産れし兒の頭は、蛇を二遍纏ひ、首・尾と後に垂れて生る。(第三)

ここでは「即」という言葉に注目しておきたい。「即」が表象不可能なものすばやい動きをかるうじて示しているからである。そして表象不可能であったものが「小子」として明瞭な表象となる点も注目される。かぐや姫も同様であろうが、柳田國男のいう「小さ子神」とは表象できないものを表象する形なのである。

王見跡、念是居小子之投石、将捉而依、即少子逃。王追少子逃。王追少子通墟而逃。少子亦返。王踰墟上而追、自墟亦通而逃走。力王終不得捉。

王、跡を見て、是に居る小子の石を投げたるなりけりと念ひ、捉へむとして依れば、即ち少子逃ぐ。王追へば少子逃ぐ。王追へば、少子墟より通りて逃ぐ。少子亦返る。王墟の上より踰えて追へば、墟より亦通りて逃げ走る。力ある王も、終に捉ふること得ず。(同)

このように小さ子は捉えがたい存在である。たとえ「王」であつても捕獲することはできないのである。

鬼亦後夜時来入。即捉鬼頭髮而別引。鬼者外引、童子内引。

鬼、亦後夜の時に来り入る。即ち鬼の頭髮を捉へて別に引く。鬼は外より引き、童子は内より引く。(同)

このように鬼と童子は互いに鏡像的であり、いずれも捉えがたい存在である。都良香「道場法師伝」(『本朝文粹』)もそうだが、逃げ去るがゆえに文章に留めようとするのである。不可視のものをいかに表象するか、それが『日本靈異記』の課題であるといつてもよい。下巻三八話の冒頭に「夫れ善と悪との表相の現れむとする時には、彼の善厲の表相に、先づ兼ねて物の形を作す」と記しているが、編者景戒は不可視なるものの表象を捉えようとするのである。

第二話では「走疾如鳥飛」を描き、第四話では「隱身」の聖を描く。興味深いのは、落雷を受けた木によつて仏像が

造られる第五話である（「有当霹靂之楠」。落雷の挿話とともに）はじまる『日本靈異記』は、いわば落雷を受けることで仏像となるべき書物なのである。第三八話で景戒が火に焼かれる夢を見るのは偶然ではない。

『風土記』の場合はどうか、山背国風土記の逸文をみてみよう。

玉依日売、於石川瀬見小川、川遊時、丹塗矢、自川上流下。乃取挿置床辺、遂孕生男子。（中略）「汝父将思人、令飲此酒」。即举酒杯、向天為祭、分穿屋葺、而升於天。乃因外祖父之名、号可茂別雷命。

玉依日売、石川の瀬見の小川に川遊びしたまひし時、丹塗矢、川上ゆ流れ下りき。乃ち取りて床辺に挿し置き、遂に孕みて男子生れませり。（中略）「汝の父と思はむ人にこの酒を飲ましめよ」といふ。即ち、酒杯を挙げ天に向きて祭らむとして、屋の葺を分き穿ち天に升りたまひき。乃ち外祖父の名に因りて、可茂の別雷の命と号く。

（引用は小学館新古典全集による）

いわゆる丹塗矢伝説だが、「雷」は正体不明の矢であり、酒杯を捧げるといふ身振りによつてしか明示できないものである。次は『塵袋』にみえる常陸国風土記の逸文である。

妹力田ヲソクウヘタリケリ、其ノ時イカツチナリテ妹ヲケコロシツ兄大ニナケキテ、ウラミテ、カタキヲウタントスルニ其ノ神ノ所在ヲシラス一ノ雌雉トヒ来リタカタノウヘニキタリヘソヲトリテ、雉ノ尾ニカケタルニキシトヒテ伊福部岳ニアカリヌ又其ノヘソヲツナギテ、ユクニイカツチノフセル石屋ニイタリテ、タチヲヌキテ、神雷ヲキラントスルニ神雷ヲソレ、ヲノノキテ、タスカラン事ヲコフ。

（同）

「所在ヲシラス」とあるように、この挿話でも「雷」はどこにいるかわからない。逆に「雷」の正体が明らかになるとき、その力は失われる。

至山覓船材。便得好材以将伐。時有人曰、「霹靂木也。不可伐。河辺臣曰、其雖雷神、豈逆皇命耶、多幣帛祭、遣人夫令伐。則大雨雷電之。爰河辺臣案剣曰、雷神無犯人夫。当傷我身、而仰待之。雖十余霹靂、不得犯河辺臣。即化少魚、以挟樹枝。即取魚焚之。遂修理其船。

山に至りて船の材を覓ぐ。便に好き材を得て伐らむとす。時に人有りて曰はく、「霹靂の木なり。伐るべからず」といふ。河辺臣曰はく、「其れ雷の神なりと雖も、豈皇の命に逆はむや」といひて、多く幣帛を祭りて、人夫を

遣りて伐らしむ。則ち大雨ふりて雷電す。爰に河辺臣、劍を案りて曰はく、「雷の神、人夫を犯すこと無。當に我が身を傷らむ」といひて、仰ぎて待つ。十余霹靂すと雖も、河辺臣を犯すこと得ず。即ち少き魚に化りて、樹の枝に挟れり。即ち魚を取りて焚く。遂に其の船を修理りつ。  
(推古紀二六年)

『日本書紀』の挿話だが、「雷」が魚の姿になったとき、それはもはや力をもちえない、むしろ喜劇的な様相を帯びる。「雷」は表象化されると力を失ってしまうのである。

以上、捉えがたい雷の表象不可能性を強調してきた。とはいえ、雷が一つの表象であることもまた事実であろう。突然の閃光と轟きが何を意味しているのか、古代社会においてその究明が必死になされたことはいうまでもない。

夏四月癸卯朔壬申、夜半之後、災法隆寺。一屋無余。大雨雷震。五月、童謡曰：

夏四月の癸卯の朔壬申に、夜半之後に、法隆寺に災けり。一屋も余ること無し。大雨ふり雷震る。五月に、童謡して曰はく：  
(天智紀九年)

『日本書紀』が雷について記すのは、雷の意味を探るためであつたはずである。それは雷というシニフィアンにふさわしいシニフィエを結びつけることであろう。その解読は雷を制御するに等しい。

皇后召武内宿禰、捧劍鏡令禱祈神祇、而求通溝。則當時、雷電霹靂、蹴裂其髻、令通水。

皇后、武内宿禰を召して、劍鏡を捧げて神祇を禱祈りまさしめて、溝を通さむことを求む。則ち當時に、雷電霹靂して、其の髻を蹴み裂きて、水を通さしむ。  
(神功紀)

此夜、雷電雨甚。天皇祈之曰、天神地祇扶朕者、雷雨息矣。言訖即雷雨止之。

此の夜、雷電なりて雨ふること甚し。天皇祈ひて曰はく、「天神地祇、朕を扶けたまはば、雷なり雨ふること息めむ」とのたまふ。言ひ訖りて即ち雷なり雨ふること止みぬ。  
(天武紀元年六月)

いずれも『日本書紀』の挿話だが、表象不可能な雷を制御できれば、天皇の力を誇示することになる。雷を制御しようとする書物、それが『日本書紀』なのである。『万葉集』卷三の「大君は神にし座せば天雲の雷の上に庵らせるかも」(二三三五番)、卷一九の「天雲をほろに踏みあだし鳴る神も今日にまさりて畏けめやも」(四二三五番)によれば、天皇は雷以上の存在である。ところで、『仏足石歌』には「雷の光の如きこれの身は死の大王常に偶へり畏づべ

からずや」とみえる（引用は岩波古典大系）。もちろん『涅槃経』を踏まえるものだが、電光と死の大王を関係させるところに神話的な論理が働いているのであろう。

2 さて軍記文学に目を向けてみたい。まず『平家物語』である。

賀茂の上の社に、ある聖をこめて、御宝殿の御うしろなる杉の洞に壇をたてて、拏吉尼の法を百日おこなはせられけるほどに、彼大楯に雷落ちかかり、雷火緩う燃えあがて、宮中既にあやふく見えけるを、宮人どもおほく走り集まて是をうち消つ。

（引用は岩波新古典大系による、巻一「鹿谷」）

藤原成親は大将になろうとして上賀茂神社に祈願するが、賀茂別雷の神は受け付けない。それが「雷」によって示されているのである。自撰歌集の末尾に「鳴神の夕立にこそ雨は降りみたらし川の水まさるらし」を据える能因の場合も、神の納受を祈念していたはずである（『能因集二五六』、引用は岩波新古典大系）。

白山の神輿、既に比叡山東坂本につかせ給ふと云程こそありけれ、北国の方より雷緩く鳴て、都をさしてなりのぼる。白雪くだりて地をうづみ、山中・洛中おしなべて、常葉の山の梢まで、皆白妙になりにけり。

（巻一「鵜川軍」）

白山の神輿が到着すると同時に、雷が響き渡り白雪が降り積もる。「雷」によって神威が示されているのである。

島のなかには、たかき山あり、鎮に火燃ゆ。硫黄と云物みちみり。かるがゆるゑに硫黄が島とも名付たり。いかづち常になりあがり、なりくだり、麓には雨しげし。一日片時人の命たへてあるべき様もなし。

（巻二「大納言死去」）

成親は亡くなり、その息子成経たちは鬼界が島に流される。「雷」によってこの世の果てであることが強調されているのである。

いかづちの落かかりたりしか共、雷火の為に狩衣の袖は焼ながら、その身はつつがもなかりけり。上代にも末代にも有がたかりし泰親也。

（巻三「法印問答」）

陰陽頭安倍泰親が地震を占うところである。「雷」をはねのけることで神の子の力が示されているのである。

夜半ばかり、富士の沼に、いくらもむれるたりける水鳥どもが、なににかおどろきたりけん、ただ一どにばと立ける羽音の、大風いかづちなどの様に聞えければ、平家の兵ども（中略）とる物もとりあへず、我さきにとぞ落ゆきける。（中略）源氏大勢廿万騎、富士河におしよせて、天もひびき大地もゆるぐ程に、時をぞ三ケ度つくりける。

（巻五「富士川」）

富士川の合戦場面では、「雷」の響きに驚いて逃げる平家軍と響きを立てて押し寄せる源氏軍が対比されているのである（滑稽な様相への転化）。『海道記』には「合戦ノ戦士ハ夷国ヨリ戦フ。暴雷雲ヲ響カシテ、日光ヲ覆ハレ、軍虜地ヲ動シテ、弓劍威ヲ振フ」とあるが、雷は化外の地からやって来るといえる（引用は岩波新古典大系）。

夜半ばかり俄に大風吹大雨くだり、雷おびたたしうなて、天霽て後、雲井に大なる声のしはがれたるをもて、「南閭浮堤金銅十六丈の廬遮那仏焼きほろぼしたてまつる平家のかたうどする物ここにあり。召しとれや」と三声さけんでぞ通りける。城太郎をはじめとして、是を聞くものみな身の毛よだちけり。

（巻六「嗔声」）

大仏を焼いた平家に味方する者が懲罰を受ける。「雷」は恐ろしい声と等価であり、天の告げなのである。

彼広嗣は、肥前の松浦より都へ一日におりのぼる馬を持たりけり。追討せられし時も、みかたの凶賊落ちゆき、皆亡て後、件の馬にうち乗て、海中へ馳入けるとぞ聞えし。その亡霊あれて、おそろしき事どもおほかりける（中略）導師には、玄房僧正とぞ聞えし。高座にのぼり、敬白の鐘うちならす時、俄に空かき曇、雷ちおびたたしう鳴て、玄房の上に落ちかかり、その首をとて雲のなかへぞ入りにける。

（巻七「還亡」）

龍馬に乗った広嗣の亡霊が現れ、かつて己を調伏した者に報復しているが、「雷」はいわば瞬時にして千里を走る龍馬なのである。

惣じて源平乱あひ、入れかへ入れかへ、名のりかへ名のりかへ、をめきさけぶ声、山をひびかし、馬の馳ちがふおとは、いかづちの如し。射ちがふる矢は、雨の降るにことならず。

（巻九「坂落」）

一の谷における合戦場面だが、「雷」が轟くというのは修羅道の特徴である。『往生要集』阿修羅道のところにも「雲雷若鳴、謂是天鼓、怖畏周章、心大戦悼」とみえる（引用は岩波思想大系）。

皇居をはじめて、人々の家々、すべて在々所々の神社・仏閣、あやしの民屋、さながらやぶれくづる。くづるる

音はいかづちのごとく、あがる塵は、煙のごとし。

(卷一二「大地震」)

『平家物語』末尾の巻では「雷」のごとき大地震が起こる(『方丈記』には「地ノウコキ家ノヤフルヲトイカツチニコトナラス」とある、引用は岩波文庫)。建礼門院徳子は生きていたうちに六道をへめぐったというが、修羅道こそ雷と地震によつて特徴づけられた世界なのである。『平治物語』の場合はどうか。

昔、北野の天神は、配流のうらみに雷をおこして、本院の大臣を罰し給ふ。これは、権化の世に出て、讒佞の臣をしりぞけられ、忠臣を賞すべき政をしめさんが為也。今の悪源太、廃官の将となりて、白昼に誅せられしを憤、雷となりて難波をけころしぬ。(引用は岩波新古典大系による、下巻「悪源太雷となる事」)

突然の閃光と轟きはきわめて表象化しにくいものである。とりあえず浮遊するシニフィアンと呼んでおくが、それを他の要素と結びつけたときはじめて物語は完成する。道真や義平はその一例なのである。官人の典型が道真であり、武者の典型が義平であろう。『平治物語』において「悪源太雷となる事」は増補部分とみられているが、軍記物語として整備されるときには不可欠の細部となつたのである。『曾我物語』の場合はどうか。

はれたる空、にはかにかきくもり、なる神おびたたくて、雨かきくれてふりければ、鎌倉殿をはじめとして、みなみなとどこほり、興をうしなひ、花やかなりし姿ども、おもひのほかにひきかへて、茅草の蓑、菅の小笠、かはりはてたるむら雨に、袂はしほれ、裾はぬれ、上下ともに露けき色、無興といふもあまりあり。

(引用は古活字本を底本とした岩波古典大系による、卷五)

この「雷」場面は、続く敵討ちの場面を予告するものになつてゐる。曾我兄弟の「自害して、悪霊死霊にもなりて、本意をとげん」(巻八)という凄まじい覚悟に対応するからであり、実際「まつこうにさしかざし、雷のごとくに、とんでかかる」「つかまんつかまんとおもひけるよそほひは、ただ、てんまの雷のおちかかるかとぞおぼえける」(巻九)と語られるからである。巻五の当該箇所は古態を示すとされる真名本にみならず、後出とされる仮名本にみられるのみだが、軍記自体に「雷」を呼び寄せる環境が存在していたというべきである。

『太平記』における雷をみていこう。巻七、船上合戦事では「雷ノ鳴事山ヲ崩スガ如シ」、巻八、山徒寄京都事では「甲冑二映ゼル朝日ハ電光ノ激スルニ不異」といった表現がみえるが、興味深いのは巻一〇、鎌倉兵火における長

崎父子の奮戦場面である。

鳴神ノ落懸ル様ニ、大手ヲハダケテ追ケル間、五十余騎ノ者共、逸足ヲ出シ逃ケル間、勘解由左衛門大音ヲ揚テ、  
「何クマデ逃ルゾ。蓬シ、返セ」ト罵ル声ノ、只耳本ニ聞ヘテ、日来サシモ早シト思シ馬共、皆一所ニ躍ル心地  
シテ、恐シナンド云許ナシ。  
(引用は岩波古典大系による、巻一〇「鎌倉兵火事付長崎父子武勇事」)

「其後ハ生死ヲ不知成ニケリ」という息子の突進ぶりはまさに雷にふさわしい。その大音を耳にした者は逃げよう  
としても逃げる事ができないのだが、逃亡の可能性は「雷」の表象可能性と響きあっているかのようだ。いく  
ら速く走つても同じ場所にとどまる、そんな不可能な空間を出現させている。

冒頭部分に「中華懼軌若履刃而戴雷霆」とある巻一二は、とりわけ「雷」と関連深い。「声ノ内ヨリ雷シテ、其光  
御簾ノ内へ散徹ス」という鶴が出てくるし(「広有射怪鳥事」、菅公説話が出てくるからである)。

菅丞相座席ヲ立テ天ニ昇ラセ玉フト見ヘケレバ、ヤガテ雷内裡ノ上ニ鳴落鳴騰、高天毛落地大地モ如裂。一人・  
百官縮身消魂給フ。七日七夜ガ間雨暴風烈シテ世界如闇、洪水家々ヲ漂ハシケレバ、京白河ノ貴賤男女、喚キ叫  
ブ声叫喚・大叫喚ノ苦ノ如シ。  
(巻一二「大内裏造営事」)

絵巻『北野天神縁起』や謡曲『雷電』でよく知られた内容だが、解脱上人の前に天魔が現れる場面もこれに近い。  
「俄ニ空搔曇雨風烈吹テ、雲ノ上ニ車ヲ轟、馬ヲ馳ル音シテ東西ヨリ来レリ(俄ニ空陰り、風烈クテ、電光ノ激遮ス  
ル間——天正本)」「(解脱上人事)」。こうして現れた天魔は天神に限りなく近いわけである。とはいえ、風雨が全く  
ない世界では困り果ててしまう。それが「内海・外海ノ竜神共、悉守敏ノ以呪力、水瓶ノ中ニ駆籠テ可降雨龍神無リ  
ケリ」という状況である(「神泉苑事」)。したがって、雷は両義的である。一方では恐れられ、他方では待ち望まれ  
ているからである。

義貞夙ニ起テ、此夢ヲ語り給ニ、「龍ハ是雲雨ノ氣ニ乗テ、天地ヲ動ス物也。高経雷廷ノ響ニ驚テ、葉公ガ心ヲ  
失シガ如クニテ、去ル事候ベシ、日出キ御夢ナリ」トゾ合セケル。  
(巻二〇「義貞夢想事」)

夢合わせでも、雷に驚くのは敗者の側とされる。新田義貞は稲村ガ崎で黄金の太刀を海中に投げ入れ龍神に祈つて  
いたが(巻一〇)、それゆえ、このような夢を見るのであろう。

黒雲ノ中ニ電光時々シテ、只今猿樂スル舞台ノ上ニ差覆ヒタル森ノ梢ニゾ止リケル。見物衆ミナ肝ヲ冷ス処ニ、雲ノ中ヨリ高声ニ、「大森彦七殿ニ可申事有テ、楠正成參ジテ候也」トゾ呼リケル。(卷二三「大森彦七事」)

大森彦七の前に楠正成の亡霊が現れたところだが、正成とはいわば雷なのである。

夜半過ル程ニ、雨荒風烈吹過テ、大山ノ如動ナル物来ル勢ヒアリ。電ノ光ニ是ヲ見レバ、八ノ頭ニ各二ノ角有テ、アハイニ松柏生茂タリ。(卷二五「自伊勢進宝劍事」)

神器の由来を語っているところだが、「雷」は表象不可能なものを表象へともたらずのである。ここでは雷が大蛇となり剣になるといつてもよい。

閏六月五日戌刻ニ、巽方ト乾方ヨリ、電光耀キ出テ、両方ノ光寄合テ如戦シテ、碎ケ散テハ寄合テ、風ノ猛火ヲ吹上ルガ如ク、余光天地ニ満テ光ル中ニ、異類異形ノ者見ヘテ、乾ノ光退キ行、巽ノ光進ミ行テ互ノ光消え失ヌ。此妖怪、如何様天下穩ナラジト申合ニケリ。(卷二七「天下妖怪事」)

もちろん、これらの電光は戦いを表象するものである。「魚鱗鶴翼ノ陣、旌旗電戟ノ光、須臾ニ変化シテ、万方ニ相当レバ、野草紅ニ染テ、汗馬ノ蹄血ヲ蹴タテ、河水派セカレテ、士卒ノ尸忽流レヲタツ」(卷二九「越後守白石見引返事」)という場面も同様であろう。

先木ヲ以テ人ヲ作テ、是ヲ天神ト名ケテ帝自是ト博奕ヲナス。神真ノ神ナラズ、人代ハテ賽ヲ打チ石ヲ使フ博奕ナレバ、帝ナドカ勝給ハザラン。勝給ヘバ、天負タリトテ、木ニテ作レル神ノ形ヲ手足ヲ切り頭ヲ刎ネ、打擲躡躡シテ獄門ニ是ヲ曝シケリ。(中略)加様ノ悪行身ニ余リケレバ、帝武乙河渭ニ狩セシ時、俄ニ雷落懸リテ御身ヲ分々ニ引裂テゾ捨タリケル。(卷三〇「殷紂王事」)

『史記』にみえる殷王の挿話である。武乙は天神に対する陵辱によつて身を滅ぼすが(『将門記』の「賊人形像着於棘楓之下」というところに似ている)、これは天神と雷の関係を明示する起源譚になっている。「雷」は天神の意志であり、儒教的な名分論にかなうものといえる。

俄ニ雷火落懸リ、入間河ノ在家三百余宇、堂舎・仏閣数十箇所、一時ニ灰燼ト成ニケリ。是ノミナラズ義興討レシ矢口ノ渡ニ、夜々光物出来テ往来ノ人ヲ悩シケル間、近隣ノ野人村老集テ、義興ノ亡霊ヲ一社ノ神ニ崇メツ、



新田大明神トテ、常盤堅盤ノ祭礼、今ニ不絶トゾ承ル。不思議ナリシ事共ナリ。

(卷三三「新田左兵衛佐義興自害事」)

討たれた新田義興が御霊として祭られるところであり、御霊信仰の生成を語るものとして興味深い。そこには火と水が不可欠であり、両者を結びつけるのが雷なのである。『太平記』においては楠正成、新田義貞、義興などが「雷」の系譜を形作っている。

鉄炮トテ鞠ノ勢ナル鉄丸ノ迸ル事下坂輪ノ如ク、霹靂スル事閃電光ノ如クナルヲ、一度ニ二三千投出シタルニ、日本兵多焼殺サレ、関櫓ニ火燃付テ、可打消隙モ無リケリ。(中略)風烈ク吹テ逆浪天ニ漲リ、雷鳴霆テ電光地ニ激烈ス。大山モ忽ニ崩レ、高天モ地ニ落ルカトヲビタタシ。異賊七万余艘ノ兵船共或ハ荒磯ノ岩ニ当テ、微塵ニ打碎カレ、或ハ逆巻浪ニ打返サレテ、一人モ不残失ニケリ。

(卷三九「自太元攻日本事」)

蒙古襲来について記すところである。鉄炮によって危機に瀕するものの、神風と雷によって日本は外敵から守られたわけで、雷の一撃は神国として日本を誕生させる重要な出来事なのである。これを語る『太平記』は『日本書紀』以上に日本の枠組みを堅固にする正典となる。<sup>6)</sup>『太平記』における「雷」は儒教的な名分論からも神話的な論理からも要請されているといつてよい。『太平記』における正成の重要性があるとすれば、それは道真を受け継いでいる点であろう。御霊となった道真は神話的論理と儒教的名分論をつないでいるが、道真の軍事的異本が正成なのである(梅に対して楠)。ところで、『方丈記』と違って『徒然草』には「雷」の一語が登場しない。兼好は「雷」の喚起する大仰なイメージを回避しているようにみえる。

3 では和歌において「雷」はどのように詠まれているのであろうか。三代集から掲げてみるが、その数はいたって少ない。

逢ふことは雲居はるかになる神のおとにききつつ恋わたる哉

(『古今集』四八二、貫之)

あまのはら踏みとどろかし鳴る神もおもふ仲をば裂くるものかは

(同七〇一、詠み人知らず)

鳴神の音にのみ聞く巻向の檜原の山を今日見つる哉

(『拾遺集』四九〇、人麿、万葉一〇九二番歌の異伝)

天雲の八重雲隠れ鳴る神の音にのみやは聞き渡るべき

(同六二八、人麿、万葉二六五八番歌の異伝)

鳴神のしばし動きて空くもり雨も降らなん君とまるべく

(同八二六、人麿、万葉二五一三番歌の異伝)

「雷」の和歌は『万葉集』に数首あるだけであり、それを受け止めているのは貫之ただ一人である(和歌の引用は岩波新古典大系による)。和歌において「雷」とは何か。見るものというよりも音として聞くものであり(「音にのみ聞く」、それゆえ見たくなくなるものである。また関係を引き裂くものであり(「仲をば裂くるもの」、それゆえ関係を強化したくなるものである。したがって、表象の問題と欲望の問題を提起しているといつてもよい。『万葉集』巻七の譬喩歌に「天雲に近く光りて鳴る神し見れば畏し見ねば悲しも」とあるが(一三六九番)、雷は見ることに於いて矛盾した感情を引き起こしている。

『枕草子』をみてみよう。

雷いと恐しう鳴りたれば、ものもおぼえず、ただ恐しきに、御格子まゐりわたしまどひしほどに、このことも忘れぬ。  
(引用は角川文庫による、九五段「五月の御精進のほど」)

よく知られた章段の一節である。清少納言は詠歌を要求されるが、雷の騒ぎですつかり忘れてしまう。雷の激しさは歌の表出を失念させるのである。『古今集』五四八番歌には「秋の田の穂の上をてらすいなづまの光の間にも我やわする」とあるが(恋一・詠み人知らず)、電光と失念の危険性は密接に結びついている。

雷は、名のみにもあらず、いみじう恐ろし。

(一四八段「名恐ろしきもの」)

表象やイメージ以上に、雷の実態は恐ろしいということであろう。二四九段には「せめて恐ろしきもの、夜鳴る神」とあり、二八一段には「神のいたう鳴るをりに、神鳴の陣こそ、いみじう恐ろしけれ」とある。二四三段「言葉なめげなるもの」に「雷鳴の陣の舎人」を挙げるのは、雷の激しさが言葉に伝染しているということかもしれない。「神いたく鳴り侍けるあしたに、宣耀殿の女御のもとに遺はしける」という詞書をもつ村上天皇の歌「君をのみ思やりつつ神よりも心の空になりし宵哉」(『拾遺集』一二四一)からは、女御を守ろうとする天皇の姿勢が伝わってくる。「雷壺に、人々集まりて、秋の夜惜しむ歌よみけるついでに、よめる」という詞書をもつ躬恒の歌「かく許をしと思夜をいたづらに寝であかすらむ人さへぞうき」(『古今集』一九〇)の場合は、むしろ緊張感の解けたゆったりした雰

困気を漂わせている。『伊勢物語』はどうか。

神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥におし入れて、男、弓、胡籙を負ひて戸口にをり。はや夜も明けなむと思ひつつるたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや」と言ひけれど、神鳴るさわぎに、え聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もなし。

(引用は角川文庫による、六段)

弓、胡籙を背負つて戸口に立つ男は、宮中の「神鳴りの陣」であるかのように振舞っている。だが、雷のために女の声は男に届かない。盗み出した女は雷とともに消えてしまう。男は「白玉かなにぞ人の問ひし時露とこたへて消えなましものを」と詠んでいるが、女の消滅は露のようにゆつくりと消えるものではなく、雷の閃光のように一瞬にして消えるものだったといえる。そして雷と鬼は表象の不可能性において相同の関係が認められるのである。『蜻蛉日記』の作者が「いなづまのひかりだに來ぬ家がくれは軒ばの苗ももの思ふらし」と詠むのは、自らを盗み出してくれる男を待っているからであろう(引用は新潮古典集成)。

稲妻の歌は『古今集』五四八番歌を受けるものが多い。

いとかくて止みぬるよりはいなづまの光の間にも君を見てしが

(『後撰集』八八三、大輔)

秋の夜は山田の庵に稲妻の光のみこそもりあかしつれ

(『後拾遺集』三六八、伊勢大輔)

今行く末は稲妻の光のまにも定めなし…

(『千載集』一一六〇、俊頼)

男性歌人のほうがより観念的といえるが、「世の中を何にたとへむ秋の田をほのかに照らすよひのいなづま」と詠む源順にとつては雷の瞬間性こそ世間の姿であり(『後拾遺集』一〇一三)、「此身電のごとし」と題して「稲妻の照す程には入息の出るまつ間にかはらざりけり」と詠む公任にとつては自身の姿なのである(『公任集』三〇〇)。(引用は岩波新古典大系)。

『うつほ物語』で興味深いのは雷の歌がいくつも出てくることである。

唯今食まむとする時に、大空かい暗がりて、車の輪のごとくなる雨降り、雷鳴りひらめきて、竜に乗れる童、黄金の札を阿修羅に取らせて昇りぬ。

(引用は角川文庫による、俊陰卷一六頁)

夕暮に、いなびかりのするを見て

いなづまの影をもよそには見るものを何にたとへむ我が思ふ人

(同三八頁)

もてわづらひ給ふ程に、大空かきくもらして、雨降りいかづち鳴りて、この琴を巻きあげつ。

(ただこそ巻一五六頁)

兵部卿の宮より、夕立のいたうする折に、

年経れどいとどつれなくなるかみの響にさへや驚かぬ君

(まつりの使巻二五一頁)

詣で給ふを、ひぢかさ雨降り、神鳴りひらめきて落ちかかりなむとする時に、右大将のぬし、三条の北の方・藤

中将よりも、あて宮にきこえさして止みなむずる事とおぼすに涙とどまらず思ほさる。

(菊の宴巻五二頁)

大空をだにある物を、けふの御ゆるこそ。

鳴る神も裂くとは聞かぬ逢ふ事を今日あらはるるかみは何ぞも

(蔵びらき中巻二九六頁)

「さらずとも、大宮とひとしく教へたてまつらむ」「な弄じ給うそ」「いかづち神にも打ち殺されたてまつらむ。

まことぞとよ」

(楼の上の下三四〇頁)

雷の光と音は琴をめぐる神話的な挿話を活気づけているが、恋の挿話では無力のようである。求婚者たちを拒むあて宮は「なるかみの響きにさへや驚かぬ君」とされている。そして神髪という掛詞にみられるように、雷は超自然的な場面から日常的な冗談事へと位置を転じ落下していくのである。『竹取物語』の大伴大納言は「竜は鳴る神の類にこそあれ：かぐや姫てふ大盗人の奴が、人を殺さむとするなりけり」と逆上して大笑いされるが、そこにも喜劇への転化を見出すことができる(引用は角川文庫)。

『源氏物語』において雷鳴は二度轟く。まず賢木巻、光源氏と朧月夜の密会が露見するところである。

雨にはかにおどろおどろしう降りて、雷いたう鳴りさわぐ暁に、殿の君達、宮司など立ちさわぎて、こなたかなたの人目しげく、女房どもも怖ぢまどひて近う集ひまゐるに、いとわりなく出でたまはん方なくて、明けはてぬ。

(引用は小学館古典全集による、賢木巻)

この「雷」の場面で重要なのは見つかるかどうかであり、いわば表象の問題である。『伊勢物語』六段を踏まえれば、

嚴重な警護のなか女を盗み出すサスペンスが漂ってくる。次は須磨巻、光源氏が暴風雨に会うところである。

海の面は、袂を張りたらむやうに光り満ちて、雷鳴りひらめく。落ちかかる心地して、からうじてたどりきて、「かかる目は、見ずもあるかな」「風などは、吹くも、気色づきてこそあれ。あさましうめづらかなり」とまどふに、なほやまず鳴りみちて、雨の脚、あたる所徹りぬべく、はらめき落つ。  
(須磨巻)

『源氏物語』において雷の場面が興味深いのは、光源氏を都から須磨へ、須磨から明石へと押し出すように機能している点である。そこにあつて不可視のものとは何か。それは藤壺の存在である。藤壺との関係が断たれたからこそ光源氏は朧月夜のもとに向かい、それが発覚すると須磨に下向せざるをえなくなるからである。もう一つ不可視のものがあるとすれば、それは道真の存在であろう。光源氏は道真のように都から追放されるからである。「日本紀の御局」と呼ばれた紫式部が歴史の苛酷さを知らないはずがない。

紫式部に関しては琵琶湖の月を眺めながら須磨巻を書きはじめてたという伝説があるが(『河海抄』)、水面に映る光が必ずしも優美とは限らない。『源氏物語』にはこのように苛烈な水面も存在するからである。それはまさにテクストという白紙の強度であり、表象の可能性をことごとく廃棄するような強烈さを秘めているのではないか。とはいえ、雷をあまり具体的に描いてしまうと、滑稽な様相を帯びることにもなる(「こほごほと鳴神よりもおどろおどろしく、踏みとどろかす唐白の音も枕上とおぼゆ」夕顔巻)。

『狭衣物語』の場合、その本文は揺れている。

げに、にはかに風あらあらしく吹て、空の気色も、「いかなるぞ」と見えわたるに、神なりの、二度ばかり、いと高く鳴りて、言ひ知らず芳しき匂ひ、世の常の薫りにはあらず、さと薫り出でたるに、まことに、頭の髪逆さまになる心地して、物恐ろしきこと限りなし。(引用は内閣文庫本を底本にした岩波古典大系による、巻三)げに風にはかに荒々しう吹きて、村雨おどろおどろしう降りたる空のけしき、いかなるぞものむづかしきに、神殿の内三たびばかりいと高う鳴りて、言ひ知らずかうばしき匂ひ、世の常の薫りにはあらず、さとくゆり出でたるに、まことに頭の髪さかさまになる心地して、もの恐ろしきこと限りなし。

(引用は流布本を底本とした新潮古典集成による、巻三)

内閣文庫本には「神なり」とみえるが、流布本は「神殿」である。雷の表象としての不安定性に通じているかのようだが、『狭衣物語』で興味深いのは鳴動が薫りと結びついて点である。崇高や美といった観念を援用しているが、崇高の領域に踏み込まざるをえないのが神話や軍記であり、美の領域にとどまろうとするのが物語なのである。ついでながら、御伽草子の『御曹司島わたり』（『室町時代物語大成』三）もみておく。

嶋の王出る、其せいは十六丈、三十の角をふりたて、眼のひかり、いなづまのごとく、いかれるこゑは、いかづちのごとく……

これは恐ろしい鬼のイメージである。

火の雨ふり、いかづちなり、くらやみに成りければ、大王、しはらく念じみれば、こくうより、白紙の巻物、三巻ふりくだる

これは『平家物語』でみた鬼界が島に共通する、この世の果てのイメージである。御曹司は島から兵法の書を盗み出そうとするのだが、この白紙こそ表象の不可能性を示すものであろう。雷の超越性が表象できないように、兵法の絶対性も表象できないのである。

4 最後に『今昔物語集』における「雷」についてみていきたい。まず巻五第四は、竜王を閉じ込めた一角仙人のもとに女性が遣わされる話である。

聖人ノ云ク、「少シ触レバヒ申サムトナム思フ」ト、糸強々シ氣二月無氣ニ責メ云フニ、女、且ハ怖シキ者ノ心不破ラジト思フ、且ハ角生テ疎マシケレド、国王態ト然力可有シトテ遣タレバ、終ニ怖々聖人ノ云フ事ニ随ヒヌ。其ノ時ニ、諸ノ竜王喜ビヲ成シテ、水瓶ヲ蹴破テ空ニ昇ヌ。昇ヤ遅キト虚空陰リ塞ガリテ、雷電霹靂シテ大雨降ヌ。女可立隠キ方無ケレドモ可還キ様無ケレバ、怖シ乍ラ日来ヲ経ル程ニ、聖人此ノ女ニ深ク染ニケリ。

（引用は岩波新古典大系による、巻五第四話）

僧にとって女の肉体は魅惑的なものであるがゆえに表象不可能なものとなるだろうし、女にとっては僧の肉体が不気味なものであるがゆえに表象不可能なものとなるだろう。両者は「雷」の表象不可能性とみごとに共鳴しているの

である。女に触れたとき喜悦をなすところをみると、一角仙人にとつて竜王とは抑圧すべき性的なエネルギーを意味しているようだ（「世ノ中ニ雨ノ降レバカク道モ悪ク成テ倒ルル也……然レバ雨ヲ降ス事ハ竜王ノ為ル事也」とある通り、それはすでに一度、一角仙人に道を誤らせていたのである。したがって、これは二度目の雨であり、二度目の雷である）。

次に卷一二第一は、神融聖人が雷を縛つて塔を建てる話である。

其ノ国ニ住ム人有ケリ。専ニ心ヲ発シテ此ノ山ニ塔ヲ起タリ。供養セムト為ル間ニ、俄ニ雷電霹靂シテ此ノ塔ヲ蹴壞テ、雷空ニ昇ヌ。願主泣キ悲テ歎ク事無限シ。（中略）聖人塔ノ下ニ来リ居テ、一心ニ法花経ヲ誦ス。暫許有テ、空陰リ細ナル雨降テ雷電霹靂ス。願主此レヲ見テ、恐テ怖レテ、「此レ、前々ノ如ク塔ヲ可壞キ前相也」ト思テ、歎キ悲ム。聖人ハ誓ヒヲ発シテ、音ヲ拳テ法花経ヲ読奉ル。其ノ時ニ、年十五六許ナル童、空ヨリ聖人ノ前ニ墮タリ。

（卷一二第一話）

最初、塔の建立は「雷」のために失敗するが、二度目には法華経の「音」で成功する。いわば音声の角逐であり、結果として雷鳴が遠ざけられる。ここで注目しておきたいのは、あたかも雷鳴が繰り返されるように、「雷」の挿話が反復される点である。『日本霊異記』第一話にも落雷の反復がみられたが、たった一回限りのカタストロフであるにもかかわらず必ず反復されるという点が「雷」の文学誌の特異性なのである（承久本『北野天神縁起』にも落雷場面は二度ある）。したがって、「雷電ノ音ヲ不成ジ」という誓いが守られるかは疑わしい。そうなれば「雷」の文学誌が途絶してしまうからである。

卷一三第三三は法華経を聴聞した竜が、自己を犠牲にして大雨を降らせる話だが、先にみた一角仙人の説話（巻五第四）と対比するべき説話であろう。いずれも勅命によって雨を降らせる話だからである。ただし、一角仙人の場合は女が派遣され、この説話の場合は僧が派遣されている。

三日ノ雨ヲ可降シ。其ノ後、我レ必ズ被殺レナムトス。願クハ聖人我が死骸ヲ尋テ、埋テ、其ノ上ニ寺ヲ起テヨ。

（中略）僧此ノ事ヲ聞テ歎キ悲ムト云ヘドモ、勅命ヲ恐ルルニ依テ、竜ノ遺言ヲ皆受テ、泣々ク竜ト別レヌ。（中

略）竜ノ契シ日ニ成テ、俄ニ空陰リ雷電霹靂シテ、大ナル雨降ル事三日三夜也。然レバ、世ニ水満テ五穀豊力ニ

成ヌレバ、天下皆直テ、天皇感シ給ヒ、大臣百官及ビ百姓、皆喜ブ事無限シ。其ノ後、聖人竜ノ遺言ニ依テ、西山ノ峰ニ行テ見レバ、実ニ一ノ池有リ。其ノ水紅ノ色也。池ノ中ニ、竜ヲ断々ニ切テ置ケリ。其ノ血ノ池ニ満テ紅ノ色ニ見ユル也ケリ。  
(卷一三第三三話)

叙述の上で「雷」の出来と竜の死は別々に描かれている。一方には喜悦があり、他方には悲哀がある。とはいへ、両者は一体のものである。光つては消え轟いては消える「雷」、その出現と同時に消滅せざるをえない竜、ここには二重の表象可能性があるだろう。竜の死骸の上に寺が建てられることで、「寺」はかろうじて表象不可能なものの表象となるのである。

卷二〇第一一は、洞窟に幽閉されていた竜が、僧の持ってきた水瓶の一滴に力を得て脱出する話である。

水瓶ヲ傾ケテ、竜ニ授クルニ、一滴許ノ水ヲ受ツ。竜喜テ、僧ニ教テ云ク、「努々怖ル事無シテ、目塞テ我レニ負レ可給シ。此恩更ニ世々ニモ難忘シ」ト云テ、竜忽ニ小童ノ形ト現ジテ、僧ヲ負テ、洞ヲ蹴破テ出ル間、雷電霹靂シテ、空陰リ雨降ル事甚ダ怪シ。僧身振ヒ肝迷テ、「怖シ」ト思フト云ヘドモ、竜ヲ睦ビ思フガ故ニ、念ジテ被負テ行ク程ニ、須臾ニ比叡ノ山ノ本ノ坊ニ至ヌ。僧ヲ延ニ置テ、竜ハ去ヌ。彼ノ房ノ人、雷電霹靂シテ房ニ懸ト思程ニ、俄ニ坊ノ辺暗ノ夜ノ如ク成ヌ。暫許有テ晴タルニ見バ、一夜俄ニ失ニシ僧、延ニ有リ。

(卷二〇第一一話)

「目塞テ」、「暗ノ夜ノ如ク」というところに「雷」の表象不可能性がよく現れている。「実ニ此レ、竜ハ僧ノ徳ニ依テ命ヲ存シ、僧ハ竜ノ力ニ依テ山ニ返ル。此モ皆前生ノ機縁ナルベシ」と僧と竜の出会いが結論づけられるが、雷の閃光や轟きのように表象不可能な何か「前生ノ機縁」であろう。ここで「雷電」が二度描かれている点にも注目しておきたい。一度目は僧一人の視点から捉えられ、二度目は僧坊の人たちの視点から捉えられている。

卷二二第七は、鷹狩りに出た藤原高藤が、雨宿りをした家の娘と契りを結び子供を授かる話である。

年十五六歳許ノ程ニ、九月許ノ比、此ノ君鷹狩ニ出給ヒニケリ。南山階ト云フ所渚ノ山ノ程ヲ仕ヒ行キ給ケルニ、申時許ニ俄搔暗ガリテ時雨降り、大キニ風吹キ、雷電霹靂シケレバ、共ノ者共モ各ノ馳散テ行キ分レテ、「雨宿ヲセム」ト皆ナ向タル方ニ行ヌ。主ノ君ハ西ノ山辺ニ、「人ノ家ノ有ケル」ト見付テ、馬ヲ走セテ行ク。(中略)



其ノ程、風吹キ雨降テ、雷電霹靂シテ、怖シキマデ荒レドモ、可返キ様無ケレバ、此テ御ス。(卷二二第七話)

ここでも「雷電」は二度描かれるが、一度目は共の者どもの行動を呼び起こし、二度目は主人公の行動を呼び起こしているのである。雨宿りの家で主人公は「独り寝タルガ怖シキ」と口にし、女と一夜の契りを結ぶ。主人公の親は「其ノママニ見エ不給ネバ」、心配している。主人公は無事帰還したものの、共の者どもとは別行動をとつたために雨宿りの家がどこにあったかわからない。独りの恐怖、危ぶまれた帰還、不可知の場所など、いずれも安定した表象を拒むものであり、表象の不可能性を示している。

高藤に雷神の面影を探ることさえできる。『世継』の類話によれば主人公の年齢は「二十ばかり」だが、ここでは「年十五六歳許」である。これは卷二二第一話の「年十五六歳許ナル童」であつた雷神と重なっている。主人公が雨宿りの家に形見として置いていく「大刀」は雷神説話に不可欠の持物であろう(高藤の孫である朝成が怨霊になるのは偶然ではないのかもしれない<sup>8)</sup>)。

この説話は「墓無カリシ鷹狩ノ雨宿ニ依テ、此ク微妙キ事モ有レバ、此レ皆前生ノ契ケリトナム語り伝ヘタルトヤ」と結ばれているが、ここでも雷の閃光や轟きのように表象不可能なものが「前生ノ契」ではないか。

こうして「雷」の文学誌を見てきたとき、『将門記』における「雷」はどのように位置づけることができるのだろうか。

「雷」は表象不可能なものと表象可能なものの接点にあるといつてよい。もちろん「雷」の表象可能性を強調すれば、道真の存在が画期をなす。雷すなわち天神というイメージが確立するからである(『北野天神縁起』にみられる雷神のイメージが広く流通するようになる)。軍記はそうした雷のイメージを生かしつつ表象不可能な戦闘を表象化したきたのである(雷の崇高)。しかし、表象化された雷が喜劇的なものに変容することも確かである(雷の喜劇<sup>9)</sup>)。緊張と弛緩といつてもよいが、それを確認して締めくくりたい。藪医者が落下してきた雷神に針治療を施す、よく知られた狂言をみてみよう。

はあ、どこやら雷の鳴る音もする、さればこそ夕立がしてきた、雷もしきりに鳴るは、落ちはせまいか、くはば

らくはばらくはばら、ひつかりひつかりひつかり（中略）はつしはつし、あ痛あ痛、やれやれ、痛ひは痛ひは、早ふ抜いてくれ抜いてくれ（引用は岩波新古典大系による、「針立雷」『続狂言記』巻一）

不可視の雷は恐怖の対象だが、表象化された雷は笑いの対象でしかないのである。前半では神鳴りが医者をつえさせ（「ひつかりひつかり」）、後半では医者が神鳴りをつえさせ（「はつしはつし」）、この反復と逆転が笑いを生み出す。医者はかつて雷神を調伏していた僧侶の後身であろう（人間の身体よりも雷神の身体のことをよく知っているので、針を使う医者は落下したまま天上に戻れなかった雷神のようにもみえる）。結末は「ひつかりひつかりひつかり、くはばらくはばらくはばら」と締めくくられるが、もはや威嚇と恐怖の言葉ではなく、ともに祝言の言葉になっている。『大鏡』の占いの挿話はぜひとも引用する価値があるだろう。

権中納言を問ひ奉れば、「それもいとやむごとなくおはします。雷の相なむおはする」と申しければ、「雷はいかなるぞ」と問ふに、「一際はいと高く鳴れど、後遂げの無きなり。されば、御末いかがおはしのまさむと見えたり」（中略）「雷は落ちぬれど、またも揚がるものを。星の隕ちて石となるにぞ譬ふべきや。それこそ、返り揚がる事なけれ」。

（引用は新潮古典集成による、巻五）  
最初出世するけれども後の続かない伊周には「雷の相」があつたとされる<sup>10</sup>。落下した雷は滑稽な様相を呈するのである（悲劇的なものが天上に上昇するのに対して、喜劇的なものは地上にとどまる）。しかし、雷には再浮上のチャンスがあり、伊周はそれ以下だという。厳肅、滑稽、再生、雷をめぐってはそうした要素を確かめることができる。

## 注

① 中野猛「雷神信仰」（『日本文学と仏教』八、岩波書店、一九九四年）は古代から近世に至る雷神信仰を取り上げ、基盤となつた在地信仰について論じている。また佐谷真木人「日本古典文学の中の雷」（『雷文化論』慶応義塾大学出版会、二〇〇七年）は軍記物語を中心に雷の場面を取り上げ、御霊信仰との関連などを指摘している。いずれも示唆に富むが、本稿は「雷」を実態的な信仰によつて根拠づけようとするものではない。むしろ不安定な表現のレヴェルにとどまつて表象可能性と不可能性の問題を論じ、いわば散種状態、放電状態の「雷」を記述しようとするものである。雷神はまず王権に屈服し次に仏教に屈服したけれども水の神、農耕神としての性格は変わらないと中野論文は結論づけて

いる。しかし、言葉としての「雷」は王権や仏教を揺るがし続けるようにみえる。

② 養蚕の表象については、拙稿「養蚕説話の構造分析」（『沖縄国際大学日本語日本文学研究』七、二〇〇〇年）を参照されたい。

③ 戦いは表象不可能な領域に属しているといってもよい。たとえば相撲である。『古事談』巻六には「或時於塗籠ノ中ニ取合ケリ、板敷ノ鳴ヲトヲヒタタシクテ、雷ノ落ルヤウニ顛音シケレト、勝負ハ敢人不知」とみえる（引用は岩波新古典大系）。

④ 悪源太雷化話については、日下力『平治物語の成立と展開』（汲古書院、一九九七年）を参照。岩波古典大系所収の『平治物語』（金刀比羅本）では雷死した者に美しい童宮城が約束されているが、そうすることで悲惨さを救済するであろう（同様の挿話は『長門本平家物語』巻一、『源平盛衰記』巻一にもみられる）。なお、高橋昌明『酒吞童子の誕生』（中央公論社、一九九二年）は源頼光が雷公に重なることを指摘している。その養女が「稲妻は照らさぬよひもなかりけりいづらほのかに見えしかげろふ」という歌を詠んでいるのは興味深い（『新古今集』一三五三、相模、引用は岩波新古典大系）。

⑤ 『北野天神縁起』にみられる日蔵上人の地獄巡りとはイザナキに続く二度目の冥界訪問であり、そこに雷が充満しているのも当然なのである（絵巻における雷の火と地獄の火は明らかに照応している）。ところで、道真が天神とみなされるようになること、『菅家文草』『菅家後集』の「雷」をめぐるの詩文は事後的に特別な意味を帯びるのではないだろうか（「初疑碧落留飛電」四番、「雷声在晦甚寛舒」五九番、「天下笑雷同」二二六番、「莫言墮戸不驚雷」二七八番、「疑雷撥夏雲」四一五番、「目見震雷之能作解」五七二番、「顛覆急於流電」六三一番、「其急急於電火」六三九番、引用は岩波古典大系）。後世の偽作とされるが、『菅家遺戒』には「凡震雷、有朝家者、左右之侍臣近席之侍女、以火炉之香煙可供主之尊耳也」とみえる（引用は岩波思想大系）。もつとも、「二氣龍に交じ雲雷章を成す」と評されているのは空海の詩文のほうである（『性靈集』序、引用は岩波古典大系）。平明な道真の詩文と違って、装飾的な空海の詩文はいわば雷同し震動しているのである。『和漢朗詠集』に「雷」の部立はみられないのは、そこに収まりのつかない危険な主題だからであろう。

⑥ 『日本書紀』や『太平記』は知の基盤となり、いわばデータベースとして活用されるのである。梁川星巖は元寇にふれ「雷車を叱咤して飄輪を走らす／須臾に万艦飛塵滅す」と詩作している（引用は小学館新古典全集『日本漢詩集』）。なお、未来記の問題については小峯和明『野馬台詩』の謎』（岩波書店、二〇〇三年）、『中世日本の予言書』（同、二〇〇七年）を参照。多数の未来記を含みもする『太平記』はそれ自体を未来記として読むことができるだろう。『太平記秘伝理尽鈔』の序には「夫太平記ハ異国本朝往昔ノ是非ヲ顯シテ後昆ノ戒メトセリ」とみえるが（平凡社東洋文庫）、過去を描いた『太平記』も現在未来に通じる「戒メ」を含むことで未来記となるからである。

⑦ 神鳴りの陣は印象深く記憶に刻みつけられるのであろう。『高倉院升遐記』には「なる神の音を聞きても雲井へと急ぎしことの忘れぬかな」という歌が記されている（引用は岩波新古典大系）。また『中外抄』上一一でも話題に出ている。

⑧ 「雲火」という楽器をもった朝成は、怨霊になつてゐる（『古事談』卷二、卷六）。

⑨ 崇高はいつも表象不可能性という危険に接している。いささか恣意的な引用になるが、用例を掲げておきたい。『文華秀麗集』一二四の詩句「石上に雲無くして鎮に雷を聴く」は瀑布を詠んだもので、崇高の定義に当てはまりそうだ（引用は岩波古典大系）。『電光影裏春風を斬る』（無学祖元「偈」）というのは雷の崇高性であり、「飽後睡魔駆れども去らず／軒雷殷殷として枕凹に吼ゆ」（野村篁園）というのは雷の喜劇性であろう（引用は前掲『日本漢詩集』）。なお「電光影裏春風を斬る」の詩句は『岷峨集』にもみえ、『空華集』には「聞雷戲作」と題された詩がある。

⑩ 「雷の相」の伊周に対して、道長は「虎の子の深き山の峰を渡る」相とされる。ちなみに『中外抄』上七四には「雷するに恐れなき物は三つなり。人界には転輪聖王、獣には獅子、鳥には孔雀なり」と記されている（引用は岩波新古典大系）。ここでは雷と孔雀が同一視されており、新古典大系脚注によれば舶来の孔雀は火事を引き起こし不吉なものともみなされたようだが、雷もまた外部からやって来るものといえる。

付記 本稿はきわめて蕪雑なものだが、その前半は大学院時代のゼミ発表に遡る。軍記について教えていただいた矢代和夫先生に改めて感謝申し上げます。さらに続稿を期すつもりです。